# 女性サン＝シモン主義者の服装と女性解放の思想

## The Clothing of Female Saint-Simonians and the Ideology of Liberating Women

新實　五穂

In France of the 1830's, Saint-Simonism is known for having established the ideology of liberating women based on sexual equality in domestic life. The uniform male Saint-Simonians adopted as a slogan of this ideology was called "the clothes of the apostle of women's liberation". But there are still a lot of uncertain points about the clothing of female Saint-Simonians consisting of a blue dress, drawers, a scarf, red hat and belt.

This thesis aims at clarifying the relationship between the female Saint-Simonian's clothes and the ideology of liberating women in Saint-Simonism with the help of newspapers by feminists, collections of discourse and memoirs. To conclude, Saint-Simonism's ideology of liberating women is embodied in the female Saint-Simonian's clothes because the drawers are a proclamation of a wife's ability versus a husband's inability, and the right a woman can also be the patriarch.

**Key words :　Saint-Simonism　feminism　drawers**

初期社会主義思想の一つであるサン＝シモン主義は、1830年代のフランスにおいて、家父長的な家族制度の廃止と家庭内での男女平等を基本にした女性解放思想を確立したことで知られる。男性サン＝シモン主義者たちが思想の旗印として採用した制服は、女性解放の思想を投影していたため、「女性解放の使徒の服」と称されたが、青いドレス、ズボン状のペチコート、襟巻、赤い帽子、ベルトからなる女性サン＝シモン主義者の服装は、未だ不明瞭な点が多い。

本論文では、女性サン＝シモン主義者の服装とサン＝シモン主義の女性解放思想との関係をフェミニスト新聞やサン＝シモン主義の説教集、回想録等を用いて明らかにする。そしてズボン状のペチコートが、夫の無能さと共に妻の有能さを示し、家長権を掌握する権利は女性にも存在することを象徴して、サン＝シモン主義の女性解放思想を具体的なイメージとしてフランスの大衆に受容させたことを指摘したい。

**キーワード：　サン＝シモン主義　女性解放思想　ズボン**

## 1．はじめに

初期社会主義思想の一つであるサン＝シモン主義は、1830年代のフランスにおいて、女性の意識改革や地位向上を促す上で重要な役割を果たしたとされている[1]。サン＝シモン主義の女性解放の思想は、家父長的な家族制度を廃止し、家庭内での男女平等を確立することを原則としていた。そして夫婦の対等な関係が、社会の男女全体に展開されていくことをサン＝シモン主義者たちは目指した。このような彼らの女性解放思想が端的に表現されているのは、男性サン＝シモン主義者たちが思想の旗印として採用した制服である。なぜなら男性制服は、胸上の名前や着用の仕方などに女性解放の思想が投影されていたため、「女性解放の使徒の服」[2] と称されたからである。この点については、拙稿「サン＝シモン主義の男性制服－着用経緯と象徴性－」[3] で明らかにした。ところでサン＝シモン主義は男性だけでなく、ウージェニー・ニボワイエやジャンヌ・ドロワンなど、後の1848年の二月革命における女性解放運動で活躍することになる女性たちや労働者階級の女性たちによっても支持されていた。彼女たちは諷刺画の対象となり、青いドレス、ズボン状のペチコート、襟巻、赤い帽子、ベルトを身に着けた姿で頻繁に描かれている。しかし女性サン＝シモン主義者の服装に関しては、未だ不明瞭な点が多い。サン＝シモン主義の女性たちが、実際に青いドレスやズボン状のペチコートなどを着用していたのか否かをはじめ、彼女たちが実際に着用していたのであるなら、なぜそのような恰好をしていたのかや彼女たちの服装はサン＝シモン主義の女性解放思想を反映していたのかどうかという問題が存在しているからである。また男性サン＝シモン主義者たちが意識的に定めた男性制服と比較した際、彼女たちの服装は、彼女たち自身の手によって定められたサン＝シモン主義の女性制服として捉えてよいのかどうかという問題も存在している。

これまでに異性装やサン＝シモン主義の女性解放運動にまつわる論考の中で、女性サン＝シモン主義者たちに焦点を当てた研究が行われており、彼女たちの服装についても若干の考察がなされている。中世から20世紀初頭までの女性とズボンの関わりを調査したロール＝ポール・フロベールは、その著書『女性と男性の服装』の中で、サン＝シモン主義者たちが費用と健康面での問題から衣服改革を試みたが、考案した服装は諷刺画の対象になっただけで、女性サン＝シモン主義者たちがそれを実際に着用するまでには至らなかったと主張している[4]。一方、19世紀の女性たちが執筆した新聞記事によってフランスでの女性解放の歩みを明らかにしたロール・アドレールは、『黎明期のフェミニスム』の第１章で女性サン＝シモン主義者たちに言及し、狂信的なサン＝シモン主義者であるクレール・デマールが、数人の女性たちにサン＝シモン主義の婦人衣装を着せることに成功したと述べている[5]。さらにサン＝シモン主義の思想研究において多数の著述があるフィリップ・レニエは、男女平等を誇張するため、女性たちがズボン状のペチコートを着用しなければならなかったことをサン＝シモン主義の最高指導者バルテルミ・プロスペル＝アンファンタン Barthélemy Prosper Enfantin（1796－1864）は誇りに思っていたと指摘している[6]。

本論文では、女性サン＝シモン主義者たちが着用したとされる服装とサン＝シモン主義の女性解放思想との関係を明らかにする。また女性サン＝シモン主義者を描いた当時の諷刺版画や戯曲を通して、彼女たちの服装がどのようなシンボリックな意味を持っていたのかについても考察する。なおサン＝シモン主義の活動を考察する際、サン＝シモン主義に属するプロレタリア女性たちが1832年８月初旬から34年４月まで発行したフランスで最初のフェミニスト新聞『自由女性』紙[7]や女性サン＝シモン主義者セシル・フルネルが主宰し、33年６月から34年３月まで刊行された新聞『新しい信仰、行伝書』の記事、そしてサン＝シモン主義の説教集や回想録等を主に用いる。

## ２．制服制度と女性サン＝シモン主義者

フランスの版画家クレマン・マルーヴルは、1832年に≪フランスの服装 No. 154：若きサン＝シモン主義の女性≫（図１）と≪フランスの服装 No. 155：サン＝シモン主義者（教父（ペール）アンファンタン）≫（図２）を制作し、マルティネ書店から刊行した。この２点の版画は、サン＝シモン主義者の姿を描いた版画の中では既によく知られたものである。マルーヴルが描いた女性サン＝シモン主義者の服装については、ドレスの裾からのぞくズボン状の下着がキュロットのようであり、男性であることと同義語のキュロットを穿くという行為によって、男性と同等の権利を主張しているとされる[8]。マルーヴルの版画を含めサン＝シモン主義の女性を描いた版画や水彩画は、管見の限りでは14点存在している。14点の内訳は、諷刺画もしくはサン＝シモン主義者が思想を普及する目的で制作したものが10点、マルーヴルの版画のようにそのどちらにも該当しないものが４点ある。例えば、1833年の石版画≪七月王政下の宗教的分野での革新者≫[9]（図３）は、ドラポルトの作とされている諷刺版画である。ドラポルトは諷刺新聞『シャルジュ』紙に雇われた石版画家で、サン＝シモン主義者でもある。背景に見える「シャラントン」と書かれた建物は精神病院で、アンファンタンがメニルモンタンで行った隠遁生活を当て擦っているとされる[10]。しかしサン＝シモン主義を扱った諷刺画について考察したフィリップ・レニエは、ドラポルトの諷刺版画が自虐の意味も込めて、サン＝シモン主義のプロパガンダの道具として使用されたと彼の諷刺画が持つ意義を強調している[11]。また同年８月の木版画≪二人の自殺についての詳細≫（図４）は、パリの印刷業者ガルソンによって版行された諷刺版画である。この版画は、サン＝シモン主義者である22歳のペレ・デ・ジザールと32歳のクレール・デマールの自殺を主題にしており、版画の下には「サン＝シモン主義者」と「サン＝シモン主義者の特徴」という題名の２つの歌詞がある。10歳も年齢の離れた男女のピストル自殺は即座に世間の知るところとなり、性悪な女性クレールが若い男性を惑わし、自殺に追い込んだと中傷された。その批判の矛先は、サン＝シモン主義へも向けられたのである。多くの場合、女性サン＝シモン主義者たちは青い簡素な膝丈のドレス、ズボン状のペチコート、赤または白の襟巻、赤い大きな帽子、ベルトを着用した姿で描写された。そして14点のうち６点には、描かれた彼女たちの脇に「自由女性 Femme libre」の標語が添えられている。

元来、サン＝シモン主義の制服制度は1830年10月の男性制服の構想に始まり、最高指導者を頂点に幹部、第二階級、第三階級そして新加入者と区分された位階制度の階級章の役割を果たすためのもの

図１　マルーヴル　≪若きサン＝シモン主義の女性≫
（1832年　FE-Icono-48-98　アルスナル図書館　パリ）

図２　マルーヴル ≪サン＝シモン主義者（教父（ペール）アンファンタン）≫
（1832年　FE-Icono-48-99　アルスナル図書館　パリ）

図３　ドラポルト　≪七月王政下の宗教的分野での革新者≫
（1833年　FE-Icono-48-102　アルスナル図書館　パリ）

図４　≪二人の自殺についての詳細≫
（1833年８月　FE-Icono-48-88　アルスナル図書館　パリ）

であった。男性サン＝シモン主義者たちはサン＝シモン主義独自の形状をした白いジレに、フランス王家の青色への憧憬から青のズボンと上着を着用し、青色の濃淡で位階の上下を表していた。礼式用のジレには全階級で紫色を用いたり[12]、31年10月に、位階制に属する人々の制服が変更されたりしたようだが[13]、「教義の成員の制服についての規約」[14] や「31年11月１日から32年２月２日までの仕立屋フリソンへの洋服の注文と修繕の総額」[15] という２つの会計記録からも明白なように青色への崇拝が揺らぐことはなかった。その後、32年４月23日にアンファンタンがメニルモンタンで40人の男性サン＝シモン主義者たちと隠遁生活を開始し、６月６日に制服着用式が挙行された。長髪の巻き毛や髭に白いズボン、赤い文字入りのジレ、青紫の上着、銅のバックル付き黒革ベルト、赤または白の襟巻、ビロードの赤いトック帽（縁なし帽）を着用した姿が、男性サン＝シモン主義者の制服姿となった。当初トック帽であった帽子は、32年11月頃に巨大なベレー帽へ変更されたようである。また制服のジレや上着を着用せず、当時の人々が一般に着ていた服装に革ベルトだけを締めたサン＝シモン主義者もいた。制服に定められた服飾をどの程度身に着けているかで位階の差が自明となる原理であった。サン＝シモン主義の男性制服は、制服着用式を経て、平等、永遠、愛、禁欲的な生活、平和的な政治の道具、自分の仕事で地位が決まるという階級章などのシンボリックなことばと共存するようになった[16]。つまりアンファンタンの指導の下、サン＝シモン主義の服装関係の総責任者であり、「どんな仕立屋の納品にも彼の点検と承認が必要とされていた」[17] と評されたエドモン・タラボや、制服をデザインし、動物画家ローザ・ボヌールの父としても有名なサン＝シモン主義の画家レイモンド・ボヌールによって、サン＝シモン主義の思想が男性制服という形で結実したのである。32年10月23日には男性制服の着用者が最多の時を迎えたが、12月にはアンファンタンの逮捕と拘留、33年２月には新たな思想のしるしとして首飾りが考案されたことなどが要因で制服制度は衰勢に向かった。結局、33年９月末にアンファンタンが「制服が信念の妨げになるようなら、それを脱ぐことを認める」[18] として、32年を中心に約３年にわたりサン＝シモン主義の象徴性を担った男性制服は終焉した。ただし33年11月に至っても、制服を手放さない者も存在していた。サン＝シモン主義者のリゴーは、33年11月７日のマルセイユの港での出来事を次のように述べている。「かなりの数の女性や男性、子供たちが河岸に沿って続いており、彼らは女性たちが旅立つのを見て、驚いているようであった。既に有名な制服を着用した周囲の人々によって、彼女たちもまた宗教的な信念から生き生きと旅立っていくのが彼らにはよくわかっていた」[19] 。またサン＝シモン主義者たちが男女司祭の発想に基づいて、アンファンタンと対を成す女性最高指導者をオリエントに求め、エジプトの地を目指した際、サン＝シモン主義の女性たちは男性制服の一部を身に着けたり、男装したりした。旅先や道中で自分の身の安全を守るためであった。エジプトでの思い出を綴ったシュザンヌ・ヴォワルカンは「私は急いで男性制服の服地を裁断し、装飾した。使い古して、用いられていない男性のワードローブから得たさまざまな布切れを私の身丈に合わせた。…フード付きの袖なし外套は、女性の体つきを包み隠して、私に不可欠な保証を与えた」[20] と記している。

1832年を中心に制服を着用した男性サン＝シモン主義者たちが制服着用式を行ったのに対して、女性たちにはいかなる儀式も存在しなかった。そして31年11月21日には、アンファンタンが女性サン＝シモン主義者たちの位階制度を解体した。女性最高指導者が現れた際、彼女が新たにサン＝シモン主義に属する女性たちの間に位階制度を設立するという彼のもくろみのためだが、位階と服装とを結び付ける制服制度の根源的な存在理由が女性たちからは欠落してしまった。それゆえサン＝シモン主義の女性たちは、男性同様の状態で自分たちの制服を保持していたとは言えない。けれども確かに、彼女たちはマルーヴルの版画に見られるような特有な恰好をしていたと思われる。女性サン＝シモン主義者たちが帰属意識を備える装飾品を初めて身に着けたのは、飾緒付きの白いリボンで、モンシニー通り６番地のサン＝シモン主義者の邸宅で1831年初頭に催された夜会でのこととされている[21]。同じ頃、「テトブー通りにある屋根が緑色の集会所」[22] の４階では毎週日曜日の正午からサン＝シモン主義者たちによる説教が行われ、説教師の一人であったエドワール・シャルトンは次のように述べている。

三列に並んだ青い服装をした若い人々が、演壇の上で交互に大衆と向き合っていた。その中には紫の襟巻に白いドレスを着用した数人の女性たちも混ざっていた[23]

1830年10月の男性制服の構想において「新たな指示があるまでは青がサン＝シモン主義の色である」[24] とされたのに対し、シャルトンが31年のサン＝シモン主義の活動を綴った回想録では、女性サン＝シモン主義者の服装は「紫の襟巻に白いドレス」と記されている。ただし彼女たちのドレスの色を青色ではなく白色としているのは、シャルトンの回想録だけである。ジョルジュ・サンドが31年２月４日にパリで夫に宛てた書簡には、女性サン＝シモン主義者の説教の情景について「青空色のビロードのドレスと白鳥の羽毛の襟巻を見せるため、常に滑稽な女教皇がそこにはいるだけです」[25] と記され、同年12月25日付の裁判訴訟を専門に扱う『ガゼット・デ・トリュビュノー』紙でも「この審問に出席している多くの傍聴人の間では、数人の青い服装の女性たちが注目を集めている。彼女たちはサン＝シモン主義に属する女性たちである」[26] と述べられている。さらに32年１月23日の『ガゼット・デ・トリュビュノー』紙の「青いドレスで注目を集めていた数人のサン＝シモン主義の女性たち」[27] や８月28日の『デバ』紙における「青いドレスで注目されていた女性サン＝シモン主義者たちを入れるため、使徒たちは部屋と玄関を往来していた。…アンファンタンの後ろには青い首飾りを身に着けたアグラエ・サン・ティレール嬢とセシル・フルネル夫人の女性二人が、サン＝シモン主義の女性説教師の名目で座っていた」[28] という記述から、女性サン＝シモン主義者たちの間でも青色への崇拝が男性制服と同様なのは間違いない。青いドレス以外にも『ガゼット・デ・トリュビュノー』紙の32年８月27、28日の合併号ではベールについての言及がある[29]。1832年の同紙上には、１月22日に口火を切った警察によるサン＝シモン主義への弾圧の結果、サン＝シモン主義者たちが詐欺罪や風俗壊乱罪、集会条例違反などで起訴されたため、１月23日から12月19日までの間に一日の全紙面を充てたものやトップ記事で扱ったものを含め計31回サン＝シモン主義者たちが登場した。

サン＝シモン主義に属する女工たちによって発行された『自由女性』紙の３号には、彼女たちの服装が当時の女性の倫理観と関係していたことを示す記事がある。同紙の主な執筆者の一人であるジョゼフィーヌ＝フェリシテが、1832年８月27、28日に重罪裁判所で行われた５人のサン＝シモン主義者たちの裁判の後に著したものである。彼女はその記事を「使徒の訴訟」と題し、次のように述べている。

間違いなく彼らが待ち侘びていること、それは新しい法を作成するために女性が男性と結束すること、そして使徒のドレスを着るために女性が針やボビンの裁縫仕事をやめることである[30]

同紙の設立人であるジャンヌ＝デジレは、同じ号の中で「古代の使徒のように我々は新しいドレスを着るため、文明の古い偏見を捨て去る」[31] と記している。二人の女性サン＝シモン主義者が社会の慣習や偏見を打破し、「ドレス」を着用することを訴えているのである。彼女たちの新聞記事以降、女性サン＝シモン主義者の服装については、とりわけクレール・デマールが専心していたようである。1832年11月17日のクレールの書簡には、毎週日曜日のサン＝シモン主義の集会で女性の服装を普及させたい旨の記述がある[32]。そして33年５月18日にルイーズ・クルザがクレールに宛てた書簡の中で、ルイーズは「別の機会に自分が考える制服についてあなたにお話しましょう」[33] と述べており、女性の服装を変更しようとする試みが二人の間であったことを推測させる。

サン＝シモン主義の女性たちは、青いドレスや襟巻などを着用した姿で1830年代初頭のパリに確かに実在していた。その「使徒のドレス」は男性制服のように位階制度に根ざしたものとは違い、裁縫仕事を離れ、社会の古い慣習や偏見に向き合わなければ着用できないという覚悟を要する服装であった。

## ３．サン＝シモン主義とズボン

サン＝シモン主義の祖師であるクロード＝アンリ、サン＝シモン Claude-Henri, Saint-Simon（1760－1825）は、女性のパンタロン pantalon 着用の一般化を女性解放へ至る一つの段階とみなしたとされている[34]。この場合のパンタロンとは、ズロースすなわちズボン状のペチコートを指し、女性サン＝シモン主義者たちが青いドレスの下に着用した衣類である。サン＝シモン主義に属する女性たちがズボン状のペチコートを着用した目的は、実は夫（男性）の無能さを示すと同時に妻（女性）の有能さを明らかにするためであった。

1832年にパリのグルネル＝サントノレ通り29番地にあるセティエ印刷所が『サン＝シモン主義の信仰と自由女性についてのサン＝シモン主義者の対話そしてサン＝シモンの信仰の難点と魅力についての大論争、女性の大勝利！！！』というタイトルのサン＝シモン主義の説教集を刊行した。この説教集は、サン＝シモン主義者とカトリック教徒との対談形式になっている。カトリック教徒から「悪魔の使徒」[35] と非難されたのを受けて、サン＝シモン主義者は次のように述べている。

私はあなた方が我々を打倒するために、結束しているのを知っています。あなた方の努力は全て無駄になるでしょう。我々はあなた方が称賛する過誤や悪習の敵です。あなた方は妻に夫への従属を強いています。妻は権利を有してなければならないし、夫に充分な特質がなければ、妻が自分の家を治めるのは当然のことです。…女性たちがその舵取りを負わなかったら、パリや他の場所にある多くの施設は失われているでしょう。事実、我々サン＝シモン主義者はこの法を作成しました。夫が用件に対処できない際、妻がその聡明さを示すことを我々は認めます[36]

この説教集には全部で９つの曲節 air が存在するが、先述した談話の間にも以下のような曲節が挿入され、家長権とズボンとが結び付けられている。

それは世界で最も素晴らしい人間である
そう、心が素晴らしき者は人間の特性を美化する
そして理性による導き手は頻繁に堕落する
あなたは船には常によい船頭が必要であるとわかっている
夫の頭脳が欠如している時、妻にはズボンが必要である[37]

ズボンと家長権との関係については、中世から19世紀に至るまでズボンを男性の権威の象徴や家長権と見なす社会意識が脈々と存在し続けていたことが明らかとなっている[38]。夫と妻のどちらが家庭の主人になるかを決定するため、夫婦がズボンの所有をかけて行う「ズボンをめぐる争い」を主題にした笑話や戯曲そして版画は、繰り返し登場している。サン＝シモン主義の説教集に与えられた、この長い表題の最後には「女性の大勝利！！！」と記されており、ズボンをめぐる争いを意識しているかのようである。またズボンを取り合う夫婦の姿を描いた版画だけではなく、15世紀後半には、ズボンをめぐる争いに勝利した妻が夫に糸紡ぎを強いる構図の版画も現れている[39]。女性サン＝シモン主義者が裁縫仕事の放棄を「使徒の

ドレス」の着用要件にした理由は、ズボン状のペチコートをドレスの下に身に着けるからである。そこには、ズボンを穿く者すなわち家長権を握る者は糸紡ぎなどしないという中世から通底する意識がある。

サン＝シモン主義の女性解放思想は、夫が妻を自分の隷従者と見なして、搾取することを禁じ、妻に有する権利を夫が保証することなど夫婦間での男女平等を基本としていた。サン＝シモン主義を同時代のフーリエ主義と比較考察した志村明子は、両者の女性解放思想が家父長的な家族制度に批判的であった点は共通しているものの、当時の社会により大きな影響力を与えたのは、現状改良主義的なサン＝シモン主義であったと指摘している[40]。要するに、フーリエ主義は家族制度の廃止が女性の解放を導くとしたのに対し、サン＝シモン主義は現行の家族制度を活用し、家庭内での男女平等の確立を掲げたのである。サン＝シモン主義とフーリエ主義が女性解放と家族制度との問題を結びつけたことにより、女性解放の思想はフランスの大衆に身近な問題となった。けれどもサン＝シモン主義の女性解放思想の方が、実現する可能性が高いと大衆には判断され、賛同者が増加していった。夫婦揃ってサン＝シモン主義を支持する者たちも存在した。女性サン＝シモン主義者たちがズボン状のペチコートを身に着けるという行為は、サン＝シモン主義の女性解放思想を表現し、普及する手段として何より相応しかったのである。

ところでサン＝シモン主義の女性は、1830年代前半に男性の手によって諷刺画や戯曲の対象に何度もなった。中でも、1832年10月６日にパリの印刷業者ガルソンが版行した木版画≪女性の新しい軍隊、機動部隊を組織した女性サン＝シモン主義者≫（図５）は、33年12月５日にアンビギューコミック劇場で初演された全２幕の幻想的戯曲『女性の王国つまり逆さまな世界』[41] に性の逆転のテーマを授けたとされている[42]。諷刺画には「打ち勝つか死ぬか」という旗印の下、右手に剣、左手に盾で武装した女性たちが将官の号令で集結する姿が描かれており、「出発の前日、将官から女性サン＝シモン主義者の軍隊に向けられた声明文」と「女性サン＝シモン主義者の戦争の歌」が添えられている。フィリップ・レニエは、この諷刺版画に関して「服装から判別できるように、将官は実はサン＝シモン主義の女性である。しかし女性兵士は空想が入り混じった軍服を着用している」[43] と述べている。戯曲は、劇作家と同時に役者としても活躍したルイ＝フランソワ＝シャルル・デスノワイエと、医者から劇作家に転向し、非常に多くの戯曲を残したコニアール兄弟との合作で、２幕とも12の場面から成る。物語は、気球で旅するフランスの若き芸術家ロドルフと奇術師のベルナールが、未だ発見されたことのない国に不時着陸するところから始まる。その国ではフランス語が話されているが、男性が法を作成し、武器を携帯し、不貞を働く主人となれるフランスとは正反対の国家で、ネローラという名の女王が国を治め、法を作成し、女性の軍隊や男性たちを囲った女王のハーレムが存在している。男性住民レーヨンスと大臣ヘレッサ、ベルナールと王室親衛隊の准尉トロンボリナ、ロドルフとネローラの恋愛の駆引きが繰り広げられた後、ハーレムの男性たちがフランス行きをロドルフとベルナールに懇願する。けれども彼ら全員が気球でフランスへ渡るのは不可能なため、女性の王国に反乱を蜂起することをロドルフは提唱する。「ペチコートの王国よ、さようなら！」[44] と叫びながら男性たちは行進し、女性の軍隊から武器を取り上げ、ネローラにハーレムの恒久的廃止、法の下の男女平等、夫婦が互いに不貞を働かないこと、今後男性が戦争をし、女性は食事を作ることの４つの条件を突き付け降伏させる。最後に王冠を手にしたロドルフは「フランスにいるようだ」[45] と感慨深げに語り、崩壊した女性の王国には「ロドルフ一世万歳！」[46] の声が響き渡る。

この戯曲の中で合唱される「あなた方の慣習は大変愚かだ、すぐに我々はそれを変更する、ズボンを穿いているあなた方女性は再びスカート状のペチコートを着用するのだ」[47] や「ペチコートの王国よ、さようなら！」という歌の文句と女性の王国に暮らす登場人物の舞台衣装は、特筆すべきものである。男性住民の舞台衣装は女性的で子供っぽいとされ、彼らは編み上げ靴に裾が紐ですぼめられたズボンを穿き、刺繍を施した飾り襟に金属ボタンの付いた上着を着て、バラの王冠を被っている[48]。他方、ギリシアの三日月刃や火色の旗付きの槍、同色の羽根を飾冠に付けた鉄兜で武装した女性兵士や女王は、脚が剥き出しの状態でサンダルを履き、銀のベルトに青空色の毛織物でできた非常に裾丈の短いフロックコートのようなものを着て、フリジア帽のような小さな帽子を被っている[49]。合唱曲でのペチコートそして青空色の上着と剥き出しの脚が、女性サン＝シモン主義者の服装を題材にしたことは間違いないであろう。また「幻想的」と称する戯曲や戯曲の顛末によって、サン＝シモン主義の女性解放が、夫婦間の問題から社会全体ひいては国家の問題に発展することはありえないと嘲笑されている。

サン＝シモン主義の女性解放を拒絶し、否定する者は何も諷刺画や戯曲を制作した男性だけではなかった。アンファンタンをはじめとする男性サン＝シモン主義者たちは、理論から実践へと移行する際、家庭内での男女平等のみを許容したのである[50]。アンファンタンはサン＝シモン主義の女性たちが自発的に活動することを快く思わず、彼女たちを監督し、コントロールしたとされている[51]。例えば、サン＝シモン主義の首飾りが男性だけに存在した事実に反発して、1833年５月にリヨンの女性サン＝シモン主義者たちが中心となって友愛や男女平等の象徴である指輪を考案したものの、アンファンタンは彼の権限を強調し、指輪を決して認めなかった[52]。

女性解放の理論に実践が完全には伴わない男性サン＝シモン主義者たちの態度は、サン＝シモン主義の女性解放思想の限界を示していると言えるかもしれない。しかしフランスに女性解放思想を構築し、普及した行為だけでも十分にサン＝シモン主義は評価されている[53]。それゆえ女性サン＝シモン主義者のズボン状のペチコートが、家長権を掌握する権利は女性にも存在することを象徴し、夫婦間で

図５≪女性の新しい軍隊、機動部隊を組織した女性サン＝シモン主義者≫
（1832年10月　ヴァンクコレクション12242　国立図書館　パリ）

の男女平等という理論の構築や思想の普及で果たした役割は看過できないものなのである。

## 4．おわりに

サン＝シモン主義者シャルル・ペルランは、メニルモンタンでの隠遁生活について「使徒の生活様式における全てが象徴的で、教訓的であった」[54] と評した。彼のことばの通り、アンファンタンの主導によるサン＝シモン主義は、全ての行動にシンボリックな意味が付与されていた。特に1832年前後のサン＝シモン主義者たちの服装にまつわる象徴性は、同時期のサン＝シモン主義の思想や活動の全体像へ到達するためには不可欠な要素である。さらに女性サン＝シモン主義者たちの服装に関しては、女性解放の思想を身近な問題へと置き換え、フランスの大衆に女性解放を具体的なイメージとして受容させた功績を特筆しなければなるまい。

サン＝シモン主義の女性たちは諷刺画や戯曲の対象となり、揶揄され、愚弄された。そして理論とは矛盾した男性サン＝シモン主義者たちの実践活動に向き合わなければならなかった。しかしサン＝シモン主義者としての活動の中で、彼女たちは女性新聞の製作や女性クラブの結成、街頭での演説などを1830年代に行っていった。19世紀のフランスでの女性解放運動は1848年におけるものが有名であるが、サン＝シモン主義の女性たちが30年代にその基盤を準備したからこそ、48年の女性解放運動が大きなものへとなっていったのである。1848年の女性解放運動の萌芽は、30年代の女性サン＝シモン主義者たちによって培われたと言うことができる。この点からも、1830年代にサン＝シモン主義の女性解放思想を伝播し、定着させるのに貢献した女性サン＝シモン主義者の服装の意義が認められる。確かに彼女たちの服装は、サン＝シモン主義の位階制度に根ざしたものでもなければ、彼女たち自身によって意識的に定められたものでもないため、男性制服とは異なるところがあるものの、男性制服の胸上の名前や着用の仕方などよりもサン＝シモン主義の女性解放思想を如実に示し、思想の普及においてより大きな役割を果たしたのではないだろうか。

註

1 サン＝シモン主義の女性解放運動については、次の二冊に詳しい。ADLER, Laure, *A l'aube du féminisme : Les premières journalistes*（*1830－1850*）, Paris, Payot, 1979.（アドレール，ロール，加藤節子・杉村和子訳，『黎明期のフェミニスム』，京都，人文書院, 1981年.）加藤節子，『1848年の女性群像』，東京，法政大学出版局, 1995年.

2 Publiées par les membres du conseil institué par Enfantin,（*Œuvres de Saint-Simon & d'Enfantin : Notices Historiques*, t. 7, Paris, E.Dentu, 1866, p. 76.（以下 *Notices Historiques* と略記）

3 拙稿「サン＝シモン主義の男性制服－着用経緯と象徴性－」,『人間文化論叢』, 第６巻，お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 2004年, 303－314頁.

4 FLOBERT, Laure-Paul, *La femme et le costume masculin*, Lille, Imprimerie Lefebvre-Ducrocq, 1911, p. 15.

5 ADLER, op.cit., p. 56.

6 RÉGNIER, Philippe,"De l'androgenèse du féminisme : Les saint-simoniens", *Cahiers du Centre d'enseignement, de documentation, de recherches pour les études féministes*（*CEDREF*）, Paris, Université de Paris 7, 1er tr. , 1989, p. 75.

7 設立人ジャンヌ＝デジレ、編集主幹マリ＝レーヌ。新聞名は『自由女性：女性の使徒』や『女性論壇』など頻繁に変更された。『自由女性』紙については、次の論文に詳しい。ELHADAD, Lydia,"Femmes prénommées : les prolétaires Saint-Simoniennes rédactrices de《La Femme Libre》1832－1834", *Les révoltes logiques*, Paris, Centre de Recherches sur les Idéologies de la Révolte, 1977, No. 4, pp. 62－88 et No. 15, pp. 29－60.

8 DUBY, Georges, PERROT, Michelle（éd.）, *Histoire des femmes en Occident 4 Le XIXe siècle*, Paris, Plon, 1991, pp. 293－294.

9 タイトルは、ヴァンクコレクション収蔵のサン＝シモン主義関係の図像についてのカタログから採用した。VILLA, Nicole, *Collection de Vinck. 6 La Révolution de 1830 et la Monarchie de juillet*, Paris, Bibliothèque nationale, 1979, p. 320.

10 Ibid., p. 321.

11 RÉGNIER, Philippe,"Le saint-simonisme à travers la lettre et l'image : le discours positif de la caricature", *La Caricature entre République et censure. L'imagerie satirique en France de 1830 à 1880 : un discours de résistance ?*, Lyon, Presses universitaires de Lyon, 1996, p. 158.

12 Règlement du Costume des membres de la doctrine, Ms. 7814, fol. 28, Fonds Enfantin, Arsenal.

13 D'ALLEMAGNE, Henri-René, *Les Saint-Simoniens 1827－1837*, Paris, Librairie Gründ, 1930, p. 118.

14 Règlement du Costume des membres de la doctrine, op.cit..

15 Montant des ouvrages fournis par Frison, tailleur, Ms. 7819, fol. 188, Fonds Enfantin, Arsenal.

16 これらの象徴的な語句は、『サン＝シモン、アンファンタン全集』の「略伝」の中で制服について述べられる際に付随する語句である。

17 PELLARIN, Charles, *Souvenirs anecdotiques,* Paris, Librairie des Sciences sociales, 1868, p. 121.

18 Publié par les femmes, *Foi Nouvelle. Livre des actes*, Paris, Alexandre Johanneau, 1833, no. 6, p. 102.

19 Ibid., no. 8, p. 143.

20 VOILQUIN, Suzanne, *Souvenirs d'une fille du peuple ou La Saint-simonienne en Egypte*, Paris, Francois Maspero, 1978, p. 348.

21 D'ALLEMAGNE, op.cit., p. 118.

22 CHARTON, Édouard, *Mémoire d'un Prédicateur saint-simonien*, Paris, au bureau de la Revue Encyclopédique, 1832, p. 21.

23 Ibid.

24 *Notices Historiques*, op.cit., t. 3, 1865, p. 52.

25 SAND, George, LUBIN, Georges（éd.）, *Correspondance*, t. 1, Paris, Classiques Garnier, 1964, p. 796.

26 *Gazette des Tribunaux*, 25, decémbre, 1831.

27 Ibid. , 23, janvier, 1832.

28 *Journal des débats*, 28, août, 1832.

29 *Gazette des Tribunaux*, 27 et 28, août, 1832.

30 *La femme libre*, 3e numéro, p. 5. 発行日は２号（1832年８月25日）と４号（９月19日）の間である。

31 Ibid., p. 3.

32 DÉMAR, Claire, PELOSSE,Valentin（éd.）, *L'affranchissement des femmes*（*1832－1833*）, Paris, Payot, 1976, p. 27.

33 Ibid., p. 140.

34 PERROT, Philippe, *Les dessus et les dessous de la bourgeoisie*, Bruxelles, Éditions Complexe, 1984, p. 264.

35 NEVEUX, *Dialogues d'un saint-simonien sur la religion saint-simonienne, les femmes libres saint-simoniennes, et grande dispute sur les inconvénients et les agréments de la religion de Saint-Simon ; Triomphe de la femme !!!*, Paris, Imprimerie de Sétier, 1832, p. 5.

36 Ibid., p. 6.

37 Ibid.

38 GRAND-CARTERET, John, *La Femme en Culotte*, Paris, Ernest Flammarion, 1899, pp. 1－20.

39 徳井淑子編訳,『中世衣生活誌　日常風景から想像世界まで』, 勁草書房, 東京, 2000年，ビュロー，ピエール，「《ズボンをめぐる争い》－ある世俗的主題の文学と図像のヴァリエーション（13－16世紀）」, 164頁.

40 志村明子，「19世紀前半フランス空想社会主義における女性解放思想－シャルル・フーリエからサン・シモン主義者へ－」,『花園大学研究紀要11』, 花園大学, 1980年, 53－69頁.

41 DESNOYER, Charles, COGNIARD, *Le Royaume des femmes ou le monde à l'envers*, Paris, Magasin Théatral, 1833.

42 RÉGNIER,"Le saint-simonisme à travers la lettre et l'image", op.cit., p. 170.

43 Ibid., pp. 162－163.

44 DESNOYER, COGNIARD, op.cit., p. 39, 41, 45.

45 Ibid., p. 45.

46 Ibid., p. 46.

47 Ibid., p. 34.

48 Ibid., p. 13.

49 Ibid., pp. 7－8. フリジア帽は、フランス革命時に自由の象徴として愛用された赤い縁なし帽子。

50 BOUGLE, C.,"Le féminisme saint-simonien", *Chez les prophètes socialistes*, Paris, Felix Alcan, 1918, p. 379.

51 ADLER, op.cit., p. 28.

52 D'ALLEMAGNE, op.cit., p. 349 et DEMAR, PELOSSE（ed.）, op.cit., pp. 99－101.

53 アドレール，前掲書, 315頁．訳者の加藤節子は「サン＝シモン主義は女性解放の理論づくりとその普及に大きく寄与した思想であって、フーリエ主義と共にフェミニスムの歴史に特筆されるべき地位をもっている」と評している。

54 PELLARIN, op.cit., p. 132.